

農林関係統計の地域的分析(その3) ……………

はじめに

前回まで2回にわたり、農用地に関する統計および生産物に関する統計を取り上げましたので、今回は農業労働力について考えてみたいと思います。ご承知のように、農家(農業経営体)や農業労働力については、経営規模別や専業・兼業別の農家数、男女別・年齢階級別農家人口、農業世帯員の就業構造など多岐の項目について統計調査が行われています。

茨城県の農家数は、1981年2月現在で17万850戸ですが、年ごとに減少する傾向にあります。農家数の変化は、専業農家と第一種兼業農家で絶対数・構成比ともに減少を示していますが、第二種兼業農家は逆に増加しています。経営耕地規模別にみるとさらに複雑で、200a未満層は全般的に減少していますが、200a以上層は増加しています。

農家数のこのような変化と並んで、農業労働力についても、質・量ともに大きな変化がみられます。農業以外の産業に従事する人の数は増し、新規学卒者の農業への就業率も低下し、全般的に農業労働力の高年齢化がすすんでいます。

労働力の減少に対応しては、各農家では機械化や農薬等の利用により省力化をはかり、手間のかからない作物を導入するなどさまざまな方法をとっています。安定かつ十分な労働力が確保できるかどうかは、今後の農業経営にとってきわめて重要な問題です。

1. 「農業労働力」の量的把握

一般に労働力を対象とした分析では、量と質が問題にされます。農業労働力の場合には、就業者の年齢や性別、専業か兼業かなどにより就業の形態はまちまちです。農業だけに従事する人でも高齢者の場合には兼業の若・壮年者より労働時間が少ないことがあり得るわけです。また、作業の内容によっては、男性と女性の能率差がないものもあり、逆に男性が主体をなす部分もあります。ここでは、限られた紙数での考察ですので、複雑な質の面での検討は避け、主として量の側面を取りあげることにします。

しかし、農業労働力は農家世帯のいわゆる家族労働力に依存する面が強く、誰がどの程度農業に関与しているかを定量的に把握しにくいものです。農林統計では、「基幹

的農業従事者」として、広く農業に従事している者のうち「自家農業だけに従事した者」および「自家農業とその他の仕事の両方に従事した者」のうち「自家農家が主な者」をあげています。しかし、現在のように兼業化が著しくすすみ、かつ省力化・機械化がすすんだ段階では、「兼業が主な者」も農業を支える労働力として十分な評価をする必要があります。

したがって、ここでは、「茨城の農業(昭和56年)」の「満16歳以上の農家世帯員の就業状態」の表から「自家農業だけに従事した人」および「農業と兼業に従事した人」を取り出すことにしました。ただし、専業の人と兼業の人については、就業日数等を考慮して次のような換算比率を適用しました。ただし、この比率が妥当かどうかは、はっきりした根拠はありません。

自家農業だけに従事した人を1とした場合	
自家農業と兼業に従事した人	農業が主の者……0.75
	兼業が主の者……0.25

ちなみに、茨城県の農家世帯員のうち農業に従事した人の総数は、40万1,456人です。うち、自家農業だけに従事した人48.5%、兼業従事者で農業が主の者10.1%、兼業が主の者41.4%となっています。また、農業に従事した日数別の「農業従事人口」では、総数43万4,808人のうち150日以上35.9%、60～149日18.5%、30～59日19.6%、1～29日26.0%となっています。自家農業だけに従事した人でも、従事日数が150日以下の人がかなりいることがわかります。市町村別にみても、自家農業だけに従事した人の数と従事日数別人口の数が近くなるのは60日～150日の間にあるところが多いようです。したがって、比率の格差はもう少し縮めてもよいかとも思われます。

2. 労働力密度図の作成

上述のようにして市町村別の「農業労働力」を求め、これをもとに経営耕地単位面積当りの労働力密度を計算しました。経営耕地面積の単位は、1haでもよいのですが、ここでは10haとしました。全市町村の平均は、10ha当り15.39人です。最も低いのは東村の7.1人であり、最も高いのは

日立市の31.8人です。

作図にあたっては、市町村別密度値の標準偏差($\sigma=4.11$)を求め、平均値からそれぞれ上下へ標準偏差の幅をとって、密度値をⅠ～Ⅶの7階級に区分しました。なお、市町村ごとの耕地面積の広狭は、市町村域の広狭とかなりのずれがある場合もありますので、図をわかりやすくするため市町村別の耕地面積を正方形の大小で表わし、その中に密度を表現してあります。このようにして作成したのが図-1です。県内をドライブした時など、田畑で多くの人影をみかける地域とそうでない地域があります。そのような印象が地図上にうまく表現できていればよいのですが。

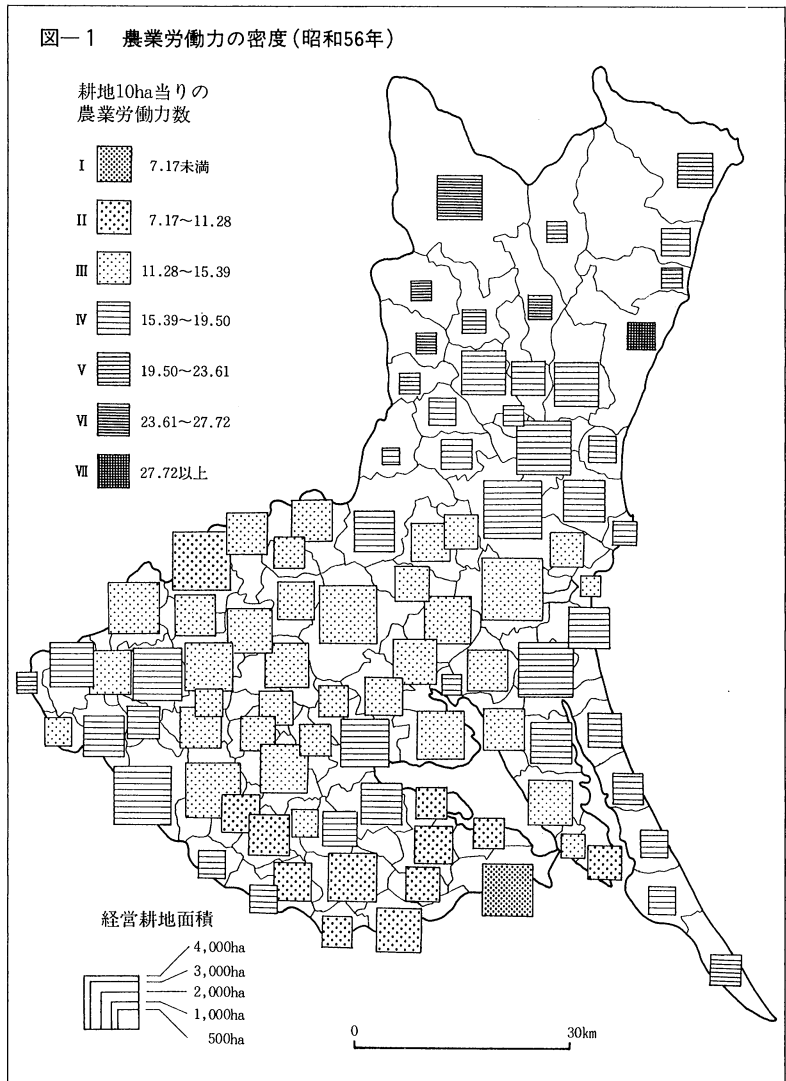
さて、図-1を概観すると、労働力密度は、県北から県南に向けて低下してゆくことがわかります。県北では、日立・水府・山方・美和・緒川を結ぶ線より北方でⅤ以上となっています。他地域でこの階級に属するのは、波崎と古河です。これより南では、那珂湊・水戸・笠間の線までがⅥの地域です。これと同じ地域は、旭から神栖までの鹿島灘沿岸、土浦・阿見・牛久地域、県西部の総和・八千代・猿島・境・岩井・守谷・取手などにみられます。ただし、土浦付近の場合には、鹿行や県西に比べて低く、平均値にかなり近い値を示します。県央から県西・県南の広い範囲には、Ⅲ以下の低密度の地域があります。とくに県南には、階級Ⅱの地域がひろがっています。

3. 農業労働力の地域的分布

ところで、図-1のような分布図をみて分布状態の説明を考える

場合には、それに作用すると思われるさまざまな要因との対応関係をみるのが普通です。関係のありそうな因子を多数並べ、数学的検討を加えてきめ手となる因子を抽出する因子分析法も広く使われますが、ここでは、いくつかの分布図との重ね合わせ法を試みてみたいと思います。

田・畑・樹園地との対応：まず、10月号で示した田・畑・樹園地の立地係数の分布図と比べてみます。田の立地係数の高い地域は、県北を除いてⅠ～Ⅲまでの労働力密度の低い地域に含まれます。とくに県南ではよく一致していま



す。農作業の機械化等により所要労働時間が大幅に減少した稲作との対応関係は認められそうですが、県央部の低密度地域はうまく説明できません。

そこで、県央部に集中が著しい樹園地の立地係数が高い地域と対応させてみました。立地係数の高い地域は県北山間の町村と土浦・玉里・下妻を除くと、労働力密度Ⅲの地域の中に含まれます。したがって、省力化のために畑に栗や梨を植えるという農家の対応が確認できそうです。

次に畑の立地係数との対応をみると、労働力密度Ⅳ以上の地域との相関がよいようです。とくに那珂川流域、鹿行、筑波・稲敷、猿島などの台地の畑作地帯では、平均よりや

や多い階級Ⅳの労働力密度のところが多く、したがって労働集約的な施設園芸や野菜栽培も盛んに行われ得るものと考えられます。ただし、稲敷台地北部の大穂・豊里・谷田部などでは、畑の立地係数は高いのですが労働力密度が低くなっています。このあたりでは、かつては労働集約的な野菜栽培地域でしたが、研究学園都市などができ、労働力が減少し、現在では粗放的な土地利用の芝生栽培地などがかなり見られます。

農家一戸当りの農業労働力との対応：各農家における農業労働力の充足のいかんは、その農家の経営形態に直接的に関係してきます。そこで、農家一戸当たりどの程度の農業

労働力が存在するかを、市町村別の平均でみることにしました(図一2)。はじめに算出した労働力を総農家数で除いただけですので、経営規模や質の相違を考慮しない大雑把な値です。

最も高い値を示すのは、鹿行の旭村で2.50、次いで波崎2.40、北浦2.38です。1.75以上の町村は、鉾田町の周囲、葦崎・牛久・阿見地域、総和・猿島の周辺などに集中してみられます。全体としては、畑の立地係数の高い地域では高く、水田の多い地域では低いことがわかります。施設園芸や野菜等の労働集約的な経営の盛んな地域は、一戸平均の労働力が1.75人以上の地域とよく一致するようです。

労働力密度の分布との対応関係をみると、一戸当たり農業労働力1.50人以上の地域と労働力密度Ⅳとの相関が比較的よいようですが、県の中央部ではかなりずれがあります。県北で、農家一戸当りの労働力数が少ないのに労働力密度が高い市町村が集まっているのは、一戸当りの経営規模が著しく小さ

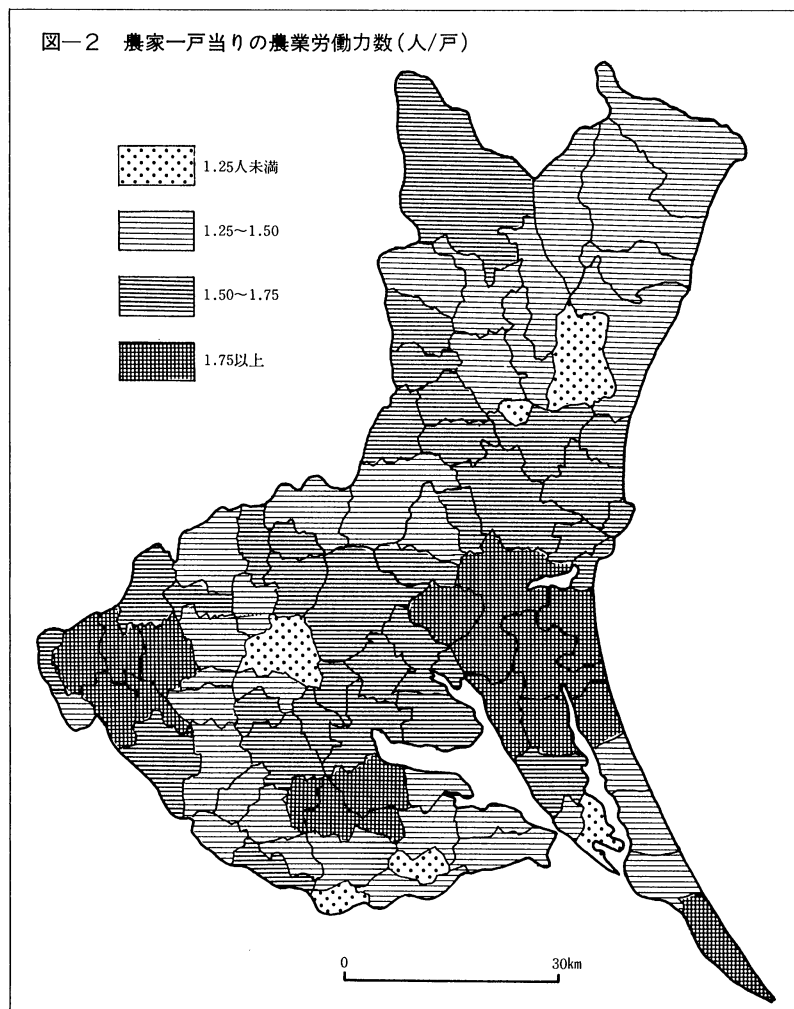
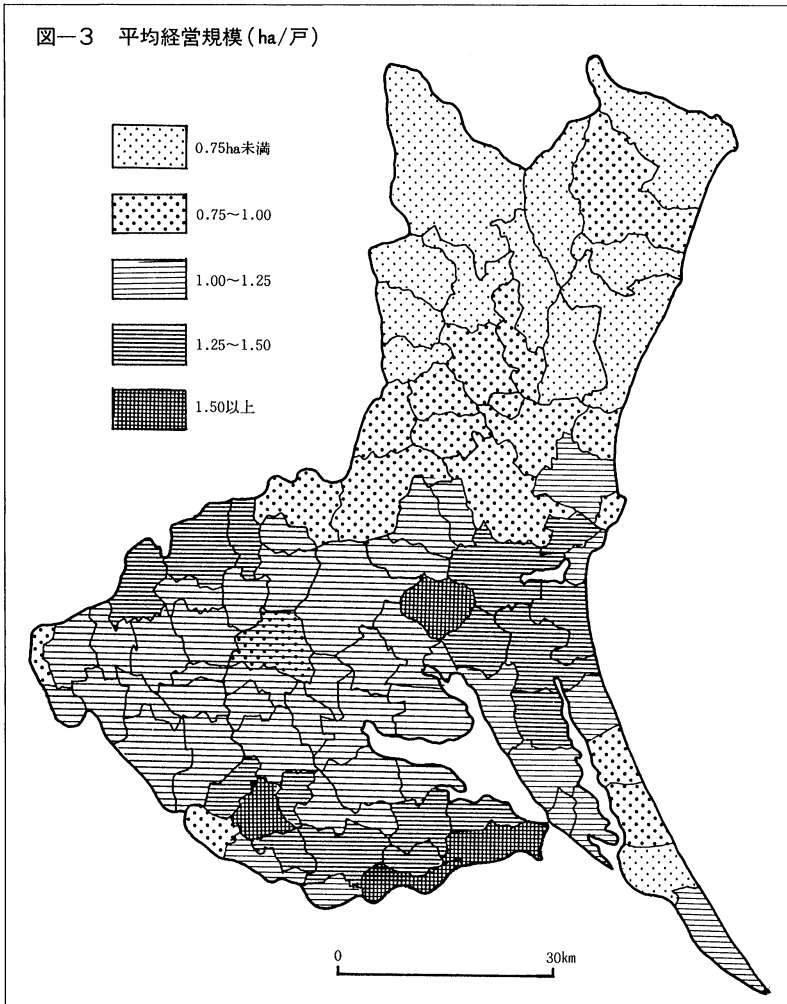


図-3 平均経営規模 (ha/戸)



また、涸沼・霞ヶ浦・北浦の間にひろがる台地上の茨城・美野里・小川・旭・銚田・北浦・玉造・大洋などの町村の場合には、平均経営規模は大きいのですが、農家一戸当りの労働力数も多いため、労働力密度は平均よりやや多い階級になっているものと考えられます。

おわりに

3回にわたる分析では、時系列分析をとりあげることができませんでした。農業をとりまく環境や農業それ自体が絶えず変動する現代では、年ごとの変化をとらえることはきわめて重要です。貴重な誌面をいただきながら、構成上の不備から重要な部分が欠けてしまいましたことをおわび申し上げます。

【編集部から】

今回で、朝野先生の本講座を終了します。

今後とも、本県統計関係者に役

いたためではないかと思われま

立つシリーズを考えておりますのでご期待ください。

平均経営規模との対応関係：市町村別に、総耕地面積を総農家数で除した平均経営規模を求め、地図化したのが図一3です。県北では、労働力密度Ⅳ以上の地域と平均経営規模1ha以下の地域との対応がよいといえます。また、県西の下館や県南の利根川・小貝川沿岸地域のように労働力密度Ⅱ以下の地域は、平均経営規模1.25ha以上の地域との対応関係ははっきりしています。つまり、山間部や都市部で経営規模が著しく小さい地域では、単位面積当りの労働力が多く、水田地帯で平均経営規模が大きい地域では労働力が少ないということがわかります。

当シリーズにご意見・ご希望等ありましたら統計指導グループまでご連絡ください。

今回で、朝野先生の本講座を終了します。

統計行政について一考察

・・・・・・・・・・・・・・・・

昭和22年に統計法が制定されて以来36年が経過し、今日では官民を問わず統計の有用性が認識され、利用者側からは益々広範囲で精緻な統計を求められている。また経済の安定低成長、行政の中央より地方への意識が定着し、これに伴って地域に密着した自らの手による地域づくりの行政のための統計データが、地方自治体にとって必須の要件となってきた。

《統計業務の主力が注がれる国の委託調査》

このような背景のもとで現在の統計体系をみると、全国的な傾向であるが現行の地方統計体系は国の委託統計調査の実施が統計業務の大半を占め、それら調査の円滑な実施に主力が注がれているのが実態であり、自らの地域づくりのための独自の統計づくりはごく限られたものになっている。現在本県が独自で調査をし統計づくりをしているのは全体の13パーセント(37調査中5調査)に過ぎず、他は中央省庁が実施する調査の地方別集計結果を利用させてもらっている。この地方別集計結果においてもセンサスの(7)と特定の調査(9)の結果のみである。しかもこれら集計結果に表章されている事項は、調査体系やその処理過程が国を中心に全国レベルを対象にして構築され、大部分が中央集計の形でなされているため国の利用し易いように作られており、またセンサスのものを除いた地方集計結果はサンプル数の不足からほんの一部のものを除いて地方で最も必要とされる市町村表章はされていない。したがって県や市町村において日々の行政に活用できる十分なデータを得るまでには至らず、地方自治体を含め直接住民に役立つ統計はごく限られたものになっている。今や地方の時代である。自らの地域づくりを策定し地域住民の福祉の向上を目指して諸行政を進めている地方側にとっては地元データの提供が不可欠のものとなっている。従来からの国を中心とした地方統計体系のなかにおいて行政の近代化に即応した身近な役立つ統計づくりをして行政施策の推進に有効なデータの提供、利用開発等を積極的に進める必要がある。

《利用の要求多い小地域統計》

地方において統計利用の要求の特に多いのは市町村データであり、更に市町村、企業等においては市町村内部と細分した丁町字別単位の小地域統計である。当然のことながら丁町字別を集めたものが市町村であり、それを集約したものが府県となり、その合計が国である。小地域単位まで出していけばあとは必要に応じて集計すればいかようにで

も結果は出せるが表章されていなければ割出しようがない。しかしすべての調査を小単位、市町村単位まで表章することはまず至難であろう。がしかし国勢調査をはじめとする事業所統計調査、商業統計調査、工業統計調査、農林業センサスの5大センサスについては共通コードによる小地域統計が可能であるので、これらの集計結果を整備して市町村の基本統計として役立てた場合はきめの細かい地域統計としてより有効な行政への利活用が期待できるであろう。

《価値高まる加工統計》

行政の企画計画担当部門においては、計画の立案、施策の策定等において必要とするデータのすべてについてあらかじめ判っていることはまずない。課題に応じた分析手法と、用いられるデータで定まるものと考えられる。各種施策等の必要性と目的が明確に判っている場合は、新規に大規模な調査を金と時間をかけて実施する場合もあり、種々な過程で突発的に必要な場合もあるが、通常は既存の統計データの範囲内で創意工夫して種々加工を行って利用しているのが一般である。このような場合、加工統計は最も有効な役割を果すことになる。統計需要の多様化等に対処するためには加工統計分野の充実が必要である。調査結果を単純集計のみにとどめないで多角的、総合的に判断、時系列、あるいは関連する分野等との比較分析を行って判り易い役立つ統計づくりをすることが今後益々不可欠のものになってくるであろう。現在作成されている加工統計としては県民所得統計、産業連関表、社会生活統計指標、鉱工業指数、消費者物価指数があるが、これら以外の委託統計調査結果についても、国より地方集計結果のデータを速報の形で配布されるものを種々加工して利用者には提供すれば利活用を促すうえで大変効果があるものと思われる。しかしこれには統計作成を担当する者の大変な努力を必要とするし、また推計分析技術等の研修養成が条件となってくる。この研修養成を含めての加工統計のより一層の充実が望まれる。

《時系列データは多くの利益をもたらす》

地域計画を策定する場合等には統計情報を利用してその地域の社会的な構造及び動向を長期的には握る必要がある。しかし現実的には55年国勢調査結果にあらわれた世帯のとり方が従前と違うといったような概念の変更、市町村合併等による行政区分変更による表章単位のズレ、統計の規模区分の数的範囲の表章の変更、その他の理由のデ

応募作品・ついに1万点を上回る

昭和58年度統計グラフコンクール入選作品決まる

《茨城県統計グラフコンクール》

第34回茨城県統計グラフコンクールの茨城県知事賞をはじめ各賞の入選作品が決定されました。

このコンクールは、茨城県・茨城県教育委員会・茨城県統計協会主催、茨城新聞社後援で行われ、県民に対する統計知識の普及向上と統計の表現技術の研さんに資するため県内の小学生・中学生・高校生・大学生及び一般から広く募集したものです。

今年度の応募作品数は11,230点(第1部3,617点,第2部5,063点,第3部2,543点,第4部1点,第5部6点)となり1.37倍の伸びをみせた昨年をさらに上回り、1.54倍の多数の応募がありました。

主な入選作品及び入選者は後述のとおりです。なお、入選者は10月18日水戸市「水戸市民会館」で開催された第25回茨城県統計大会において表彰されました。

◇ ◇ ◇

選 評

審査員 茨城県教育研究会統計教育研究部長

立原 宣光

喜びと感謝を

本年度は応募作品、実に11,230点を数え、34年のコンクール史上最高であり、全国においても驚異の数と見られております。特に第3部(中学生)は、なんと昨年の3倍という増加であり、第4部(高校以上の学生)に貴重な1点の応募があり、この部の今後の増加を期待するものであります。数だけでなく質的向上もすばらしく、県審査では、優劣つけ難いすぐれた作品も多かった。誠に喜ばしい限りで、関係者の方々のすぐれた企画と県内各学校の理解と協力を心から敬意を表します。

作品のあらまし

統計グラフへの関心が一段と高まりをみせてきたと言えるでしょう。全体的に表現技術の向上がみられ、力作が大変多かった。県審査で優秀作品21点を全国コンクールに出品し、そのうち11点が入賞しました。50%を越す入賞率で、関係者一同喜びに浸っております。

第1部(小1～小3) 観察、調査したものをグラフ化することで、資料の集め方まとめ方に低学年らしい工夫や努力のあとが見られた。特に1・2年生の子どもらしい表現の作品が多かったことはよかった。内容は身近なものが多く、中には父母に対する子どものかわいい願いなど、ほほえましいものもある。知事賞「しかられるのはどんなとき」(大野村・中野西小1年)1年生らしい作品でかわいい。表現も適切、叱られた時のようすが眼に浮かぶようです。

第2部(小4～小6) 統計資料の活用、また観察、調査した結果をグラフ化することで、構図・色彩の工夫がみられすばらしい作品が多く、優劣つけ難い作品も多かった。しかし、中には副題、説明文の量と大きさ、円・帯グラフの描き方の基礎で表示もれ、正確さなどで不十分な作品もみられた。知事賞「不安な米の将来」(結城市・城南小6年)減反による米の生産減と米への依存度から食料不安がささやかれているが、子どもなりにそれを捉え、グラフ化したのであるが、レタリング文字、グラフの配置・立体感、色彩、地の色、模様など画面構成が主題とマッチし、すばらしい作品である。

第3部(中1～中3) 全般に主題・副題のつけ方に工夫がみられ、また、レタリング、構図、配色など技法のすぐれた、しかも調和のとれた作品が多く、さすが中学生だけあって見応えがある。知事賞「伝統を守れるか桑苗多産地」(結城市・結城中3年)結城は本県有数の蚕業地、しかも、伝統ある結城紬の生産地であり、その養蚕業の推移と現状を表現したグラフである。画面の構成、グラフの図形、配色の視覚的効果などすばらしい。

第4部(高校生) 有難い貴重な1点「成功させよう科学万博」(日立一高1年) 中学時代からの基礎の上に乗っての作品だけあって、割に多いグラフの多様な表現、レタリング手法の良さ、色彩の美しさ、主題の焦点化など、すぐれた作品である。

第5部(一般) 6点あり。何れもすぐれた作品で、うち3点は全国で入賞を勝ちえた。

全体をとおしお願い

主題に対する考慮——即ち何を訴え、何を考えるのか、明確にし、グラフの構図化に一層の工夫を。奇をてらい過ぎて複雑に表現する傾向がみられた、グラフの特色、視覚

に訴える面など原点に帰って考えること大事か。審査基準に外れないよう規格、数量的処理、誤字などに注意を。

第34回茨城県統計グラフコンクール入選者

知事賞▷第1部「しかられるのはどんとき」(大野村立中野西小学校1年 岩崎友子)▷第2部「不安な米の将来」(結城市立城南小学校6年 長本博美・高瀬典子・古沢ゆかり)▷第3部「伝統を守れるか桑苗多産地」(結城市立結城中学校3年 山下宗彦・横川聡)▷第5部「心のふれあいお父さん頑張って!」(友部町 青木勇一)

県議会議長賞▷第1部「大切に使ってね」(下妻市立大宝小学校3年 高田真紀子)▷第2部「四年生から見た先生」(日立市立水木小学校4年 塚本由美子)▷第3部「育てよう緑の森」(結城市立結城中学校1年 塩谷奈緒子, 加藤直美, 橋本弘, 猪俣修)▷第4部「成功させよう科学万博」(県立日立第一高等学校1年 椎名秀文)▷第5部「パートタイマーの現状は」(勝田市 川野辺清)

県教育委員会教育長賞▷第1部「おとうさんもっとあそんでよ」(茨城町立上野合小学校1年 倉本幸子, 皆川律子, 栗原清人, 田谷野誠),「わたしのにわにはちょうちょうがいっぱい」(日立市立水木小学校2年 高津戸律子),「ガミガミお母さん」(三和町立駒込小学校3年 渡辺亜紀, 川崎麻紀子)▷第2部「食事はみんなで食べたい」(下館市立川島小学校4年 宮田大輔),「本はぼくたちの友達」(日立市立水木小学校5年 平沢孝, 土屋清之, 工藤元),「団らんもっと心のつながりを」(結城市立結城小学校6年 館野典子, 中沢幸江, 江原綾香)▷第3部「塾・誰のために行ってるの?」(岩井市立岩井中学校3年 大河内志保, 倉持昌代),「あなたの悩みも勉強」(茨城町立桜丘中学校3年 井坂喜久雄, 長津裕士, 今井喜美子, 佐久間里美, 志水正美),「楽しかった修学旅行」(関城町立関城中学校3年 草間太, 小林和彦, 田中芳和)

県統計協会総裁賞▷第1部「こわいものはなあに?」(三和町立諸川小学校1年 中尾学, 鈴木智己, 岡田明子),「いまいちばんほしいものは」(茨城町立大戸小学校2年 沢島英義, 二宮重仁, 郡司聡),「こんなおやつがたべたいなあ!」(茨城町立上野合小学校2年 小沼一雅, 小橋基司, 村田真一),「きゅうしょくだーいすき!!」(日立市立水木小

校2年 河村奈美),「たのしい子ども会」(筑波町立菅間小学校3年 飯村文人)▷第2部「ぼくたちは読書ずき」(下妻市立大宝小学校4年 横瀬史人),「考えたいテレビの見方」(三和町立名崎小学校5年 長谷川維新),「父親との対話」(結城市立山川小学校5年 海老沢めぐみ, 内海明美),「期待される科学万博一つくば'85」(結城市立結城小学校6年 好井貴之, 高津真弓, 中田陽子),「テレビより読書を」(笠間市立笠間小学校6年 鶴田ゆり, 高柳由理)▷第3部「たった一言のあいさつなのに」(岩井市立岩井中学校2年 亀崎仁美, 滝本たまき),「中学生の意識」(結城市立結城南中学校2年 西村恵美子, 小川和代, 倉持京子),「死者数は減少したものの,依然多いこどもの交通事故」(八千代町立八千代第一中学校2年 岡田寛子, 染野祥子),「伸び続ける養育費」(結城市立結城中学校2年 飯島美知子, 戸田ユキ子, 山口智子, 柳田修子),「精一杯やった部活動さてその後は」(結城市立結城南中学校3年 池田真由美, 渡辺祥子)▷第5部「みんなで走ろう森のスポーツオリエンテーリング」(北茨城市 金澤勲),「国鉄・郵便もサービスの向上を」(友部町 稲野辺敏明),「病める学校教育」(牛久町 吉原富久江)

茨城新聞社長賞▷第1部「じをきれいにかきたい」(北茨城市立大津小学校1年 高倉裕美, 渡辺季代子, 東小川芳香)▷第2部「こんなに多い忘れもの」(下館市立川島小学校6年 山田博英)▷第3部「不足している血液 もっと献血を!」(岩瀬町立西中学校2年 堀田朱美)

県統計協会会長賞▷第1部「じぶんであらせるよかみのけ」(三和町立八俣小学校1年 沼田真, 染谷憲司),「ぼくのわたしのゆめ」(結城市立江川北小学校1年 坂入裕一, 稲葉真由美),「きゅうしょくはカレーごはんがすき」(大子町立佐原小学校1年 国谷暁美),「そとであそぼうよ」(茨城町立大戸小学校1年 雨谷浩美, 雨谷崇),「かぞくのなかでだれがすき?」(日立市立東小沢小学校1年 西野貴史, 高野真由美),「ぼくらとしよりっ子」(境町立森戸小学校2年 大場宏則, 吉岡紀子),「やさしいおとうさん」(北茨城市立大津小学校2年 天津朋史),「父さんたばこやめられますか」(三和町立大和田小学校2年 児矢野明, 船橋宏之, 鮎川恵),「ゴミっていっぱいあるなァ」(北茨城市立大津小学校3年 小松憲司),「『ただいま』よりれいぞうこ」(金砂

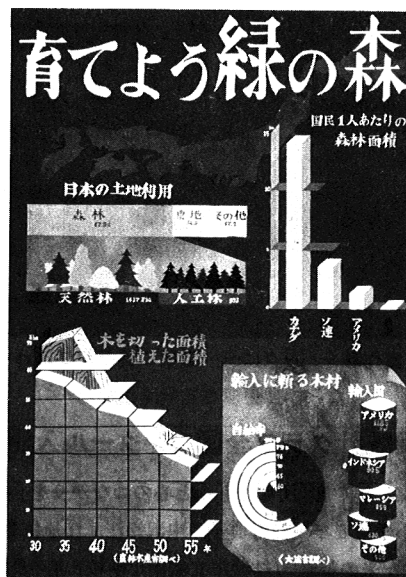
郷村立金砂小学校3年 会沢正実, 岡崎博之, 富田秀之, 宮本康子)▷第2部「里美村のカソは進む」(里美村立大中小学校4年 高星範秀),「お手紙でふれあいを」(取手市立吉田小学校4年 武藤隆洋),「今年の夏は暑かった!」(筑波町立小田小学校4年 飯塚美和子, 倉持則子),「テストとわたしたち」(日立市立水木小学校5年 八野恵美),「知ってほしいぼくらのなやみ」(土浦市立真鍋小学校5年 山田豊),「農家を支えるもの」(谷和原村十和小学校5年 久松正),「楽しかった夏休み」(下館市立大田小学校5年 竹沢賢, 倉持憲義),「かさは泣いているよ」(結城市立江川南小学校6年 伊藤由香, 大嶋啓子),「ますます栄える日立港」(日立市立水木小学校6年 湧井晶, 佐藤浩美),「僕たちの交通安全」(友部町立北川根小学校6年 津田政弘)▷第3部「科学博によせる期待」(結城市立結城南中学校1年 館野吉明, 江原正人, 氏家俊之),「抑えられるか成人病」(七会村立七会中学校1年 阿良山早苗, 田中香織, 富田眺美, 富田博美),「何でも話せる親友」(結城市立結城南中学校1年 荒川薫, 友村千秋, 後藤千賀子),「古紙はどこへいく」(結城市立結城中学校1年 石井修, 野沢大輔),「友達がいてもさみしい」(岩井市立岩井中学校2年 直江真理子, 直江泰代),「中学生親と子の現状」(那珂町立第二中学校2年 大部恵美子, 小室和子),「結城の養蚕業一拡大してゆく経営規模」(結城市立結城中学校3年 山口美奈子, 屋代恵美子),「しらけている中学生一教師への要求は強い」(結城市立結城南中学校3年 広瀬真弓, 渡辺好美),「中学生の健康と気力」(八千代町立八千代第一中学校3年 古谷和枝),「考える親と子」(那珂町立第二中学校3年 片岡奈保子)▷第5部「頼るのは友人」(牛久町 吉原喜久江)

《統計グラフ全国コンクール》

昭和58年度統計グラフ全国コンクールにおいて、本県から11点の作品が入選しました。中でも、結城市立結城中学校1年生(塩谷奈緒子, 加藤直美, 橋本弘, 猪俣修)の作品が第3部において特選に輝きました。これは、県審査入選作品の中から優秀作品21点を出品していたもので、実に5割強の入選をみたわけです。

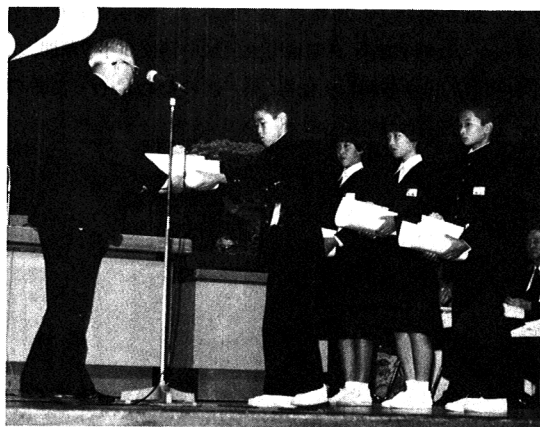
また、本年度の全国コンクール応募作品数は66,821点となり、その中で約17%を占める11,230点の作品が本県から

入 選〔特選〕《第3部》



結城市立結城南中学校1年

塩谷奈緒子 加藤直美
橋本弘 猪俣修



全国統計大会で行われた表彰式

の応募作品です。これは、昨年に引き続き全国一の応募数を記録しました。

なお、入選作品は、全国各地を巡回し、国民に対する統計思想の普及啓発に広く活用されることになっています。

全国コンクール入選作品及び入選者は次のとおりです。



受賞作品をバックに……自然に笑みがこぼれる

第31回統計グラフ全国コンクール入選者

第2部 ▷7席「団らんもっと心のつながりを」(結城市立結城小学校6年 館野典子, 中沢幸江, 江原綾香)▷8席「不安な米の将来」(結城市立城南小学校6年 長本博美, 高瀬典子, 古沢ゆかり)▷佳作「本はぼく達の友達」(日立市立水木小学校5年 平沢孝, 土屋清之, 工藤元)

第3部 ▷特選「育てよう緑の森」(結城市立結城中学校1年 塩谷奈緒子, 加藤直美, 橋本弘, 猪俣修)▷9席「楽しかった修学旅行」(関城町立関城中学校3年 草間太, 小林和彦, 田中芳和)▷佳作「塾・誰のために行ってるの

?」(岩井市立岩井中学校3年 大河内志保, 倉持昌代), 「あなたの悩みも勉強」(茨城町立桜丘中学校3年 井坂喜久雄, 長津裕士, 今井喜美子, 佐久間里美, 志水正美)

第4部 ▷6席「成功させよう科学万博」(県立日立第一高等学校1年 椎名秀文)

第5部 ▷4席「国鉄・郵便もサービスの向上を」(友部町 稲野辺敏明)▷5席「心のふれあいお父さん頑張っ
て!」(友部町 青木勇一)▷8席「パートタイマーの現状
は」(勝田市 川野辺清)

(統計課・統計指導グループ)

'84 統計グラフカレンダーについて

第34回茨城県統計グラフコンクール入選作品を使用した「1984統計グラフカレンダー」ができました。

このカレンダーは、県内の小・中学校、高等学校、市町村、県の機関等へ配布する予定です。カレンダーとしての利用だけでなく、統計グラフを勉強するうえでの参考資料として利用されることとなります。



展示会場



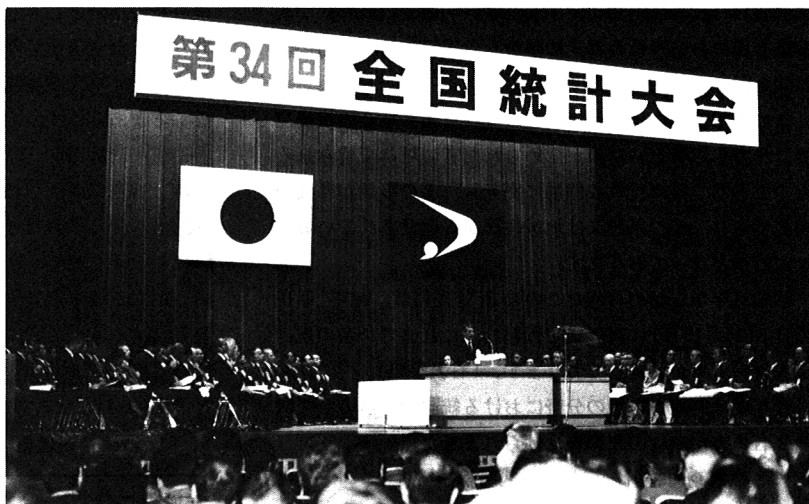
全国統計大会に参加して

去る10月27日、本県とは歴史的にも極めて縁深い秋田県において、第34回全国統計大会が開催されました。私は上司の配慮もあって初めて本大会に参加する機会に恵まれ、茨城県関係者47名の一員として出席してまいりましたが、県の依頼によりこのご報告を申し上げたいと思います。

大会の詳細については、全国統計協会連合会発行の「統計通信」などによって報告がなされるものと、ここでは私自身が感じたことを中心に述べてみたいと思います。

この大会で特筆すべきは、式典の内容もさることながら参加したものでなければわからないその雰囲気であり、それは荘厳で格調高く、参加者を感動の世界へいざなわずにはおかないすばらしいものがあります。どん帳があげられ、照明に浮き上がった舞台上に統計界のオピニオンリーダーの方々勢揃いしているさまを眼前にした時、言いようのない興奮を覚えました。

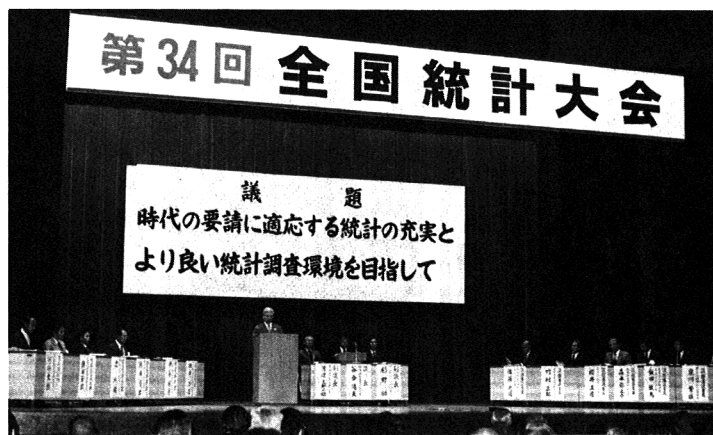
この感動の中、開会宣言が告げられ、続いて森田大会長が「厳しい統計環境の中におかれてはいるが従来の考え方



全国の統計調査関係者が一堂に会した式典風景

にとらわれず、変転する社会の実状に即応した思い切った変革を行うなどして、愛する統計事業をさらに進展させよう」旨のあいさつを気品溢れる穏やかな口調で10分の余述べられましたが、この間、会場は恐ろしくらしいの静けさに包まれました。この緊張は、一堂に会した統計関係者それぞれに、調査環境の急激な悪化と行政簡素化のしよせ等による危機的共通意識があったことにより生まれたもので、今後は、この共感領域をさらに拡大していく必要があると強く感じました。

また、会長は、革新とか、革命的、変革といったおよそこれまでの統計界では聞くことのない、むしろタブー視されていた感のする言葉を使って、統計の歩むべき道を示唆されました。これは、統計制度の再建が成った昭和30年代後半の高度経済成長期から、「保守性」に対する考え方に誤りが生じていることを指摘したものと推察します。真の「保守」とは、変わらざるを得ぬ状況では慎重さを伴いながら、徐々に変わることをその内容に含んでいるのであって、このことを私共は理解する必要があります。 「保守」すなわち「頑迷固陋」であっては、絶対にならないと思います。



議事・この中で大会参加者の総意と決意が広く表明された

ついで、秋田県知事及び秋田市長が歓迎の言葉を述べられ、その後表彰へと移りました。我国統計界の最高の荣誉である大内賞の授賞をはじめ、各省庁大臣表彰、統計グラフ全国コンクール入選者表彰等が行われましたが、この栄に浴するまでのご労苦に対し、参加者一同が心からの温かな拍手を贈りました。そこには、統計に係わる仲間であれば醸し出せないすばらしい光景があったのです。拍手の余韻さめやらない中、行政管理庁長官等の祝辞と内閣総理大臣のメッセージが披露され、最後に受賞者代表が謝意を表して式典は終了致しました。

さらに大会は、議事、次期開催県(京都府)挨拶、記念講演と続くわけですが、とりたてて記す内容もなく、ここで大会外のことに触れてみたいと思います。

本大会は、全国の関係者が年に一度あいつどい、統計調査に従事する苦労や誇りを語り合いながら、士気を高めて統計の発展を期す主旨で行われていますが、現実には大会は一日限りであり、他県関係者との交流などは殆んど図れない状況にあります。その意味で、大会前夜、茨城県関係者全員が同じホテルに宿泊し、懇親の宴が持たれたことは極めて有意義でありました。筑波郡を初め県内各地域から参加された調査員さんや、県及び市町村担当者との語らひは、翌日が大会というムードも手伝って真に迫った実のあるものとなりました。県の粋な計らいに改めて感謝申し上げます。



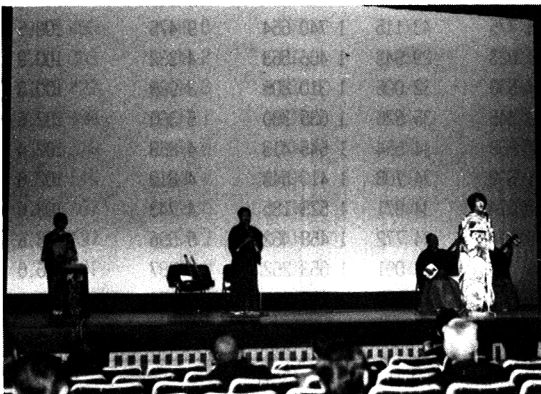
熱心に見つめる本県参加者

すとともに、大会の主旨を活かす有効な手段として、今後とも継続されんことを希望します。

大会前、私は、統計の将来に対し深い危惧を抱いていました。それは、「地方の時代」と言われながら一向に進まない地方における統計の利用、行政改革による総理府統計局等の統廃合と財政圧迫、プライバシーの保護に象徴される統計ばなれ等、枚挙に遑がない暗い材料ばかりが目立ったからであります。しかし、戦後という現下の比ではない厳しい時代に情熱を持って統計の再建に取組み成就した先達者に接し、さらには、当面する困難な情勢にまっこうから立向おうとする参席者の熱気と心意気を目の当りにした時、この不安は払拭され、新たな意欲をかきたてられたのです。

世界に冠たる我国の統計に自信と誇りを持って、地方統計充実のため精進することを決意している、現在の私です。

(美野里町企画課企画調査係主事 沼田和美)



アトラクション・会場を魅了する郷土芸能の「秋田民謡」